



TITLE:

# ダイチン・グルン初期の言語生活 と文化政策( Abstract\_要旨 )

AUTHOR(S):

庄, 声

---

CITATION:

庄, 声. ダイチン・グルン初期の言語生活と文化政策. 京都大学, 2015, 博士(人間・環境学)

ISSUE DATE:

2015-03-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k19065>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開

京都大学	博士（人間・環境学）	氏名	庄 声
論文題目	ダイチン・グルン初期の言語生活と文化政策		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>本博士学位申請論文は、のちに北京を首都としてダイチン・グルン（大清国）を建てたマンジュ（満州）人が、まだ入関前に、瀋陽でグルン（満州語で「集落・国家」の意）を樹立した時期における言語生活と文化政策を論じたものである。扱う史料は満州文字と漢字で書かれた文書や書物が中心で、それによって、17世紀の東アジアにおいて、大陸中央部にあった明王朝と、マンジュ人の南に位置した朝鮮王国に対抗する組織としてグルンを樹立した過程におけるいくつかの特徴的なトピックを考察する。論文全体は大きく2部にわかれ、第Ⅰ部は4章、第Ⅱ部は2章で構成されている</p> <p>第Ⅰ部「マンジュ人とその多元的文化」では、ダイチン・グルン樹立の際の地理的状況や部族名称の由来、初期の文字文化、あるいは漢民族の種々の文化を受容していく具体的な過程などを考察する。</p> <p>第1章「マンジュ人とその名称」： 西洋人の著書でしばしば「tartars」（タルタル、「韃靼」）と書かれた民族は、自分たちの部族をもともと「ジュシェン」（「女真」）と呼んでいたが、初代ハンであったヌルハチを嗣いだホンタイジはその名称が正確ではないとして、1632年に「我々はマンジュである」と宣言した。この名称変更は部族のルーツに対する認識をふまえておこなわれたもので、そこにチョオ・メルゲンという人物が大きな役割を果たすのだが、その人物についてこれまでの解釈では想像上の人物と考えるのが主流であった。それに対して著者は、チョオ・メルゲンはチンギス・ハンの事績においてきわめて重要な役割を果たした実在の人物であることを、『集史』や『元朝秘史』などの史料を分析することによってあきらかにした。</p> <p>第2章「マンジュ人の文字文化」： ダイチン・グルンには、マンジュ人のほかにモンゴル人、漢人、朝鮮人などが暮らしていたので、社会では必然的に多種類の言語と文字が用いられた。その実際の様相について、著者はいまでも北京や瀋陽あるいは台湾などに残る文書や書物、あるいは木簡、牌子（通行手形）、扁額、さらには銅銭鑄造の鋳型など当時の実物資料を広く渉猟して、グルン樹立初期の社会がマンジュ語・モンゴル語・漢語がいたるところで併用される多言語文化であることの実像をあきらかにした。</p> <p>第3章「マンジュ人の読書生活について」： 書物を通じて学術と文化を発展させることは漢文化の根幹に位置する営為であり、マンジュ人も漢民族からその点に関して大きな影響と啓発を受けた。マンジュ人には自己の伝統を重んじる気風を有するだけでなく、さらに異文化を受容することにも熱心であったから、彼らはさまざまな交易の機会を通じて明や朝鮮から漢字文献を収集し、知識人たちが熱心に読んだ。漢字で書かれた書物を読むためにはまず漢字を学習し、習得する必要があるが、その際の教科書として宋代に編纂された伝統的な識字教科書『百家姓』が使われたように、マンジュ人は漢文化の受容にきわめて積極的であった。書物は明や朝鮮から持ち渡られるだけではなく、</p>			

やがてグルン内部においても編纂・刊行されるようになったが、その時には明から投降し、政権内部に位置していた漢人集団とマンジュ人の知識人がきわめて重要な役割を果たした。

第4章「17世紀におけるマンジュ人の語る漢文化」： マンジュ人は漢民族の文化を非常に深く、広範囲に取りこんだ。たとえばヌルハチは漢語（漢民族の言語）を話す能力をある程度は身につけていたと思われ、さらに漢文で書かれた歴史書や物語を愛好した。彼の愛読書には漢語の口語を理解しないと読解できない白話小説まで含まれていた。次のホンタイジの時代には漢文による兵法書（たとえば『六韜』）の研究が進められ、他にも政治の参考に資することを目的として、編年体の歴史書である『資治通鑑』関連の書物や儒学の経典である「四書」などに通暁することが奨励された。

第Ⅱ部「グルンの文書と印璽の登場」では、ダイチン・グルンの特徴であった多種類の言語と文字による文化の状況を論じ、あわせて印璽制度の実態を考察する。

第5章「漢文文書から『太宗実録』の編纂をめぐる」： ヌルハチからホンタイジの時代にかけて、ハンに歴史を教える侍講者となったのはおもにマンジュ人であった。ハンへの上奏文は明王朝の制度をそのまま導入し、口頭と文書によるものがあつたが、ともに満漢バイリンガルの官僚が翻訳して上奏した。当時の官僚にはマンジュ人だけでなく、漢人にもバイリンガルが数多く存在した。多種類の言語と文字を使用する文書の作成や、朝廷における議論で多種類の言語がとびかう状況において、このような人材がハンと官僚組織との間の架け橋として非常に重要な役割を果たした。また伝統的な中国王朝の例にならって、ハンについて実録が作成された。その代表例は『清太宗実録稿本』であるが、そこには当時の漢語で使われる俗語が多用されている。従来の研究では『満文原檔』と漢文実録が翻訳面で多大の関係を有するとされていたが、本論文は漢文実録は『満文原檔』とは直接関係せず、むしろ漢文による他の諸文書と密接な関係を有することを証明した。

第6章「グルンの印璽制度をめぐる」： ヌルハチはジュシェン人が12世紀に建てた「金」国にならって新しいグルンを樹立し、ハンと皇帝を兼ねて、明王朝や朝鮮王国に対して独立を宣言した。その時からマンジュ文字による印璽を外交文書に用いて独立をアピールしたが、しかし明からは、漢字以外の文字を用いた印璽は効力を持たないものとして拒否され、印影に線を引かれて突き返されるなど、外交上の争いの焦点となった。そのような状況下において、モンゴルのリンダン・ハンが病死するとその妻と一族がアイシン・グルンに投降し、モンゴルで伝国の印璽とされていたものを差し出したが、それには漢字のみで「制誥之寶」と刻されていた。この印璽を入手したことによってグルンの国号がアイシンからダイチンと改められ、新政権においてはこれが唯一の印璽として、外交を含むさまざまな詔書に使用された。このような状況から、やがて伝統的な漢文化における印璽制度がグルン内部に積極的に導入され、さらに「満漢合璧」（満州文字と漢字を併記したもの）の印璽への切り替えが急速に進められた。

(論文審査の結果の要旨)

本博士学位申請論文は、17世紀の東アジアにおいて、明王朝と朝鮮王国に対抗して樹立されたダイチン・グルン成立初期の言語と文化をめぐる種々の諸相を考察したものである。

1616年にダイチン・グルンの初代ハンとなったヌルハチは、12世紀到北京を首都として金王朝を建てたジュシェン族の末裔で、その子であるホンタイジの時代にはその部族名を「マンジュ」と改称した。ヌルハチが建てたグルンには当時の地域的な状況によって、ジュシェン族のほかにモンゴル族、漢族、朝鮮族など多種類の民族が暮らしており、社会全体はもちろん、マンジュ族を中心に構成される支配層内部においても、マンジュ語以外に多種類の言語と文字が用いられていた。のちに入関し、中国中央部から西域にいたる広大な地域を領土とする清帝国を建てると、儒学を中心とした伝統的な漢文化を大量に導入し、また「科挙」によって選抜された文人官僚が封建的専制皇帝を補佐する体制が強固となり、しだいに漢民族の文化が圧倒的に優位を占めるようになっていった。そのようなマンジュ人の政治体制の変遷に関しては、これまでも大量の研究がおこなわれている。しかし入関前の時期におけるグルンでの多言語社会の具体的な状況については、従来ほとんど研究がおこなわれていなかった。本論文にはダイチン・グルン初期の社会と文化において、多種類の言語と文字がそれぞれどのような場において使用され、いかなる役割を果たし、さらに後世にどのような影響を与えたかなどの点について、詳細かつ精密な論証が展開されており、この点において、本論文は他に類例を見ない卓抜した画期的なものと評価することができる。

マンジュ人が北京を首都として清帝国を建てる前の状況については、これまでも中国では陳捷先や杜家驥、日本においては内藤湖南、島田正、神田信夫、山根幸夫などによる多くのすぐれた先行研究がある。しかしそのほとんどは「八旗」

(満州人が所属した軍事組織)の成立と展開を議論の中心に据えた政治史や、国家機構の拡大に連動する官僚制度の変遷、あるいは明王朝との抗争から李自成との関係、そして最終的な勝利にいたる過程に関する研究などであって、ダイチン・グルン初期の言語文化をとりあげ、そこに重点的なスポットをあてた研究は皆無といってもよい状況であった。それはひとえに、この領域の研究においてはグルン内で用いられた多種類の言語を十全に理解し、それぞれの言語を表記するための文字で書かれた文書や書籍を精密に読解することの困難さが大きな理由であったのだが、その点に関して、著者にはまことに申し分のない有利性が存在している。

著者は中国の少数民族の一つであるシボ(錫伯)族の出身である。ジュシェンの一支部族であったシボ族はもともと満州地方に暮らしていたが、清王朝の領土拡張にともなう遠征に従軍し、乾隆帝がジュンガルを版図に入れたあとはイリ(伊犁)に派遣されて駐防兵となった。これがいま新疆ウイグル自治区に暮らす新疆シボ族の起源であり、著者もその血統をうけついでいる。マンジュ人のオリジナ

ル言語であるマンジュ語は清朝の漢化とともにしだいに使われなくなり、現在の東北地方ではすでに死語となっている。しかし新疆には《生きたマンジュ語》がいまも残っており、新疆シボ族はアルタイ語族満洲語に属するシボ語を日常的に話し、マンジュ文字を改良したシボ文字を使用する。そこには彼らの民族的なアイデンティティが存在し、それとは別に歴史的な経緯から、シボ語のほかに漢語は当然として、カザフ語やウイグル語などシルクロード地域一帯で使用される諸言語やモンゴル語、さらには近年の政治的情勢によってロシア語など、きわめて多種類の言語と文字に彼らは通曉している。

著者はそのような言語環境に育った優位性を本論文において遺憾なく活用し、発揮した。その一例をあげると、内藤湖南が瀋陽故宮で発見した『満文老檔』の元になった檔案が、1931年に北京内閣大庫から発見された。しかしその研究がほとんど進まないうちに盧溝橋事件が勃発し、戦乱の中でこの檔案は故宮文物とともに南遷し、さらに戦後は台北故宮博物院に収蔵された。これは現存最古のヌルハチとホンタイジに関する詳細な編年体資料であり、入関前の1607年から1636年にいたる約30年間の政治・軍事を研究する重要な文献である（2006年に『満文原檔』として台北故宮博物院から影印出版）。この檔案は中国王朝の例にならって作られたマンジュ語によるハンの実録であり、のちに漢文による『清太宗実録稿本』などが作られたが、これまでの研究では『満文原檔』と漢文実録は翻訳面で大きな関係をもつとされていた。しかし著者は精密な文献批判と多種類の言語で書かれた史料に対する正確な読解によって、漢文実録は『満文原檔』から直接翻訳されたものではなく、漢文で著された他の文書・書物によって作成されたことを証明した。またマンジュ人が漢文化を導入する過程で、儒学の文献のみならず通俗的な白話小説まで対象とされていたことを著者はあきらかにし、この言語交流の際には満漢バイリンガルの官僚群が言語の架け橋として甚だ重要な役割を果たしていたことを証明した。これらはいずれも著者が保持する言語的優位性によってはじめて達成された研究成果である。さらに著者の考察対象は官撰の記録のみならず、当時の日常生活にかかわるさまざまな日常的文物にまで及んでいて、そこに視野の広さが看取される。

本論文はこれまで研究がほとんど進んでいなかった多言語文書の成り立ちや社会制度と文字の有機的な関連などにおいて研究を大きく前進させる、きわめて質の高いものとなっている。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成27年1月23日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分のあいだ当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日：                      年              月              日以降